

研究の成果と課題

課題に対する実態調査

児童に対する実態調査（肯定的意見の割合）	教職員に対する実態調査（肯定的意見の割合）
①自己肯定感・有用感について 79.9%	①指導を通しての児童の変容について 83.3%
②日常生活等における課題意識 83.3%	②児童の日常生活等における課題意識 72.6%

調査期間：令和元年10月23日～25日 対象：本校児童358名 本校教職員22名

【成果】

令和元年10月に実施したアンケートでは、79.9%の児童が4月と比べて自己肯定感が高まったと回答している。これは、学級会の最後の教師の話で、児童のよかったところを具体的に伝え続けたことで、互いのよさを再確認し、自分たちのよさや頑張りに気付き、温かい雰囲気の中で学級会を行えるようになってきたことが大きな原因として考えられる。また、少人数グループで解決方法を話し合うことで、考えが広がり様々なアイデアが生まれ、互いの意見に共感したり、よさを認め合うことができるようになったりする姿が多く見られるようになった。

児童が自発的・自治的に活動できるように、学級会コーナーを充実させてきた。これにより、話し合うことが明確になり、児童の中で共通理解ができたり、話合いの見通しをもつことができたりした。事前指導で計画委員会と話合いの流れを確認することで、児童が計画委員会で準備したことを十分に活用し、時間を意識し、軌道修正しながら学級会を進めることもできるようになってきた。

日常生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全における課題について、児童と教員の感覚に差がまだ見られるものの、その差は埋まりつつある。ICT機器等を活用し、事前にアンケートした結果を分かりやすく提示したり、客観的に物事を捉えさせるなど、発達段階に合った提示の仕方をしたりすることで、題材についての理解を深めることができた。これにより、88.3%の教職員が、授業を通して児童の意識の高まりを実感していると回答している。

【課題】

児童自らが生活上の諸問題を見だし、多様な議題で話合い活動を行うことができるよう、ふだんから意識をもたせる必要がある。また、学級会において、よりよい合意形成を図るために、児童が異なる意見や考えをもとに、様々な解決方法を考えたり、互いに研鑽し合ったりできるよう、児童側だけでなく教師側の具体的な手だてを考えていく必要がある。

児童の実態に合わせて年間指導計画をさらに見直し、指導の内容や時期を学校として明確にしていく。さらに、児童の問題意識を高めるために、児童の実態に応じた題材設定と提示方法をブラッシュアップしていく。

T2の活用については、役割分担や授業展開について事前の打合せを丁寧に行い、指導の内容や方法、授業会場（場所）などを再検討していく。